

(様式 4)

平成 27 年度 日 立 市 教 育 研 究 会 先 進 校 等 調 査 派 遣 研 修 報 告 書

日 立 市 立 河 原 子 中 学 校 教 諭 西 川 久 美 子

- 1 派遣期日 平成 27 年 11 月 17 日 (火)
- 2 研修先 学校名 宇都宮大学附属中学校
所在地 栃木県宇都宮市松原 1 丁目 7 番 38 号
<http://www.ks002.edu.utsunomiya-u.ac.jp/>

3 研修内容

研究主題「一人一人の生徒を伸ばす評価の充実を図り、4 技能を総合的に活用するコミュニケーション能力の基礎を養う指導の在り方」

(1) 研究の在り方

研究校では、日頃から生徒とのコミュニケーションを重視し人間関係を築いた上で英語科の指導目標である 4 技能を総合的に活用しながら、楽しく、そしてコミュニケーション能力を確実に伸ばす授業を実践している。基盤は 3 年間を見通した到達目標であり、学年の枠にとらわれずスパイラルに繰り返し学習し、生きた英語を身に付けている。そのために、表現活動のテストでは段階を踏んだ到達目標を設けてゴールに向けた指導を行っている。また、全学年の導入での帯活動で双方向でのコミュニケーション活動を実践し、基礎力を養っている。

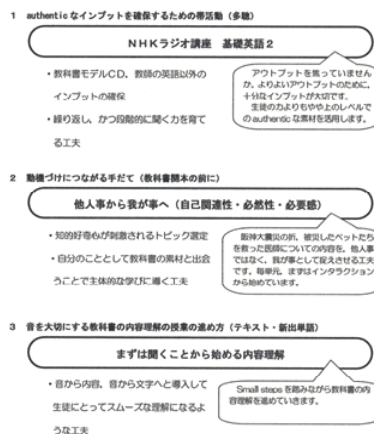
(2) 授業参観

〈1 年生の授業〉

- ① 導入 英語の歌
簡単な会話
- ② 展開 自分の考え (辞書を活用)
ペアでの会話
グループでの話し合い
発表
- ③ 終末 自分の考えを英語でまとめる

〈2 年生の授業〉

- ① 導入 英語の歌
簡単な会話
- ② 展開 教科書の内容理解
 - ・ 英語での Q&A
 - ・ 単語の確認 (辞書を活用)
 - ・ 内容確認 英語での Q&A
- ③ 終末 内容理解を英語でまとめる



(3) 研究協議

① 授業の在り方について

- ・ 英語科としての学習の流れを統一しておく。
- ・ 中学生としての最終目標を明確にしておく。
- ・ 題材を通した目標だけでなく 1 時間毎の学習目標を明確にしておく。ただし、生徒の実態に応じて臨機応変に組み立てていく。
- ・ 教科書の内容であっても生徒にとって身近な話題としてとらえられるような切り口で題材を紹介する。(導入の工夫)

研修校で活用している授業参観のポイント

- ②コミュニケーション能力の育成にあたって
- ・基礎的な力を十分に身につけさせる。
 - ・それらを活用して「自分の考え」が表現できる練習をしておく。
(授業開始後すぐの帯活動で3年間を通して学習する。)
 - ・双方向のコミュニケーションを重視し、「相手に伝える」ことを意識した表現方法で会話や発表を行う。
- ③ CAN·DO リストを活用した評価
- ・生徒の実態に応じた評価方法を取り入れる。さらに、到達目標を明確にし、生徒にも伝えておく。目標に向けて今何をしているのか、どんな力がつくのかが分かっているれば学習意欲が高まり、目指す姿に向けて学習を継続することができる。
- ④英語を教えることについて
- ・即効性の成果を求めない。1時間の授業で全ての結果が出るわけではないので、1学期を通して、さらには1年間を通してつけたい力を目標にし、焦らない。生徒の「わからない」という気持ちに向き合うこと。ただし、1時間、1時間の授業は大事にすること。
 - ・自立的な学習者である生徒を育てるために、教師自身が自立した指導者であり続けること。教師自身のアンテナを高くしておく。日常生活の中に様々なヒントが隠されているので材料になるような経験を積んでおく。
- ⑤質疑応答
- Q1 授業ではあらゆる場面で辞書を活用していたが、教科書に出てこない難しい単語の扱いをどうしているのか？
- A1 「相手に伝える」ことを目的にしているのでやさしい単語に言い換えたり、その単語の意味を説明できるように指導している。
- Q2 英問英答の授業についていけない生徒は？
- A2 生徒同士の話し合い活動は日本語でおこなっているので、そこでの教え合いや学び合いが成立している。しかし、附属だからできるのかもという思いはいつももっている。公立校に戻った時にもできるのか？という思いもある。

4 感想

特に研究授業を意識した特別なものではなく、日頃の実践を参観できたことは大変参考になった。研究主題である4技能を総合的に活用したコミュニケーション能力を身につけて生き生きと活動している生徒の姿を見て、授業の質が問われることを実感した。また、自分自身が指導過程で課題としている教科書の内容理解について、どのように指導しているのかを観ることができて勉強になった。

コミュニケーション能力については、表現活動としてのアウトプットに着目されがちだが、それには、アウトプットできるだけの中身がともなわなくては英語で表現することはできないため、それ以上のインプットとしてラジオ教材や英語の歌など様々な教材を活用している点も学ばせていただいた。

一番印象に残ったことは、「教師目線」ではなく、「生徒目線」での授業の組み立てである。英語科主任の田村先生自身の内地留学での経験が、「生徒」の立場で授業を進める上での大きな原動力になっていることに感銘をうけた。自分自身が「わからなかった」経験やずっと座ったまま授業を受ける苦痛から、「楽しい授業・わかる授業」の実践をより心がけているという言葉が印象に残った。

「できるようになりたい」というすべての生徒の願いを、日々の授業の中で1つ1つ達成させていき、そのゴールとして自分の言葉で自分の考えを「英語で伝えることができる」という生徒を一人でも多く育成していくことが私たちの仕事であることを実感させられた。この研修に参加させていただけたことに深く感謝し、研修を通して学んだことを糧にさらに研鑽を積むと同時に、今後の校内での研修にも活かしていきたい。